

第一回仏教図書館協会研修会

「仏教伝来－仏教系図書館の使命とは何か－」(講演)

大谷大学図書館長 木 村 宣 彰 (教授・仏教学)

大学図書館は、これまで大学の学術研究の拠点として、教育および研究に不可欠な図書資料や学術情報を収集、整理し、これを教職員や学生に提供するという重要な機能を果たしてきた。また今日では、地域社会における生涯学習などの拠点としての図書館の使命が要求されている。更に、国際化、情報化の現代社会に適切に即応するためにネットワークの整備、各種のデータベースの充実などの機能も強く要求されている。本学でも情報ネットワーク、学内ランが設置され、図書の公開検索などに対応しようとしている。更にまた、今後は各大学等の間でネットワークを構築し相互に図書情報、学術情報のために利用できるようしなければならないであろう。

このように、21世紀を間近にひかえた今日、大学図書館を取り巻く情況は大きく変化し、このような環境の変化は、当然のことながらそれに伴って図書館は大きな変革を迫られている。

このようなとき、大学図書館、殊に仏教系大学の図書館に関係する者は、仏教の図書館がどういう機能を持っているのか、本来どういう機能を持たねばならないのかを十分に考えて時代の要求に即応していくかなければならない。仏教系大学の図書館は、その特色ある個性や伝統を失うことなく、それを堅持しながら現代社会の変化に応じて、適切な情報を受発信する機能や能力をより一層高めなければならない。図書館も人間と同じく、それぞれの個性を守りながらその能力を高めるようにつとめなければならない。情報・通信に関する科学技術の発達した現代社会に応じるための能力を高めることによって、その本来の

仏教系図書館という個性や伝統を失ってはならない。

言うまでもなく、図書館には図書・資料をはじめとして、あらゆる情報を収集するという任務をもっている。図書館員(司書)は、図書をはじめとする様々な情報を収集するためには、まず、何よりも収集すべき情報の内容を十分に理解し、選別する能力を養わなければならない。

多様な図書・情報が氾濫している中で、我々大学図書館の一員としては、図書館を利用する学生や教職員あるいは社会人のニーズを的確にとらえて資料情報の評価、選別するという役割や機能が大切になってくる。選別して集められた情報を保存をし、整理をするそういう機能が要求されている。いつでも、誰でも利用できる情報を整理し、保存をし、提供することが大切である。我々は仏教系大学図書館の一員として、大学における研究や教育の心臓部を形成している。学生部や教務部の役割とはおのずから違いはあるが、研究・教育の支援というところで果たす役割は極めて大きく、その図書館の在り方によって、それぞれの大学の研究教育の死活が決まってくるといつても決して過言でないであろうと思う。

今日のお話のテーマを「仏教伝来」としたのは、実は仏教図書館の一員である我々の役割が仏教の伝来に関係した先達の課題と異なるものではないのではないかと考えたからである。二千数百年も以前にインドに興起した仏教が、やがて東アジアの端の日本に伝来し、そこに生きる人々に生きる指針を与え続けている。その仏教の伝来に関わった人々が、命

がけで果たしてきた役割は、実は、今日の仏教系図書館員が果たすべき役割に極めて近いものがあると強く感じるのある。

仏教は今から二千数百年前インドで興起したわけであるが、インドと中国との間には世界の屋根と称される峻厳な山々が遮り、過酷な大砂漠が横たわっており、両国との間で人的な交流を遮断していた。このような地理的な過酷な条件を乗り越えて、中国からインドに法を求め、インドから中国に仏教を伝える人々があった。かくして、インドから中国に仏教が伝来し、東アジア全体に広がって行く。ここで東アジアというのは、中国を中心とする漢字文化圏、殊に漢訳経典に基づく仏教が人々の生き方や文化一般に影響を与えた地域を指している。

インドから中国へ仏教が伝わって来るには、大変な困難が伴っていた。中国の数千年の歴史の中で、異国の、異質の文化を取り入れたのはインドで起こった仏教だけであった。現代の中国は勿論、様々な世界の文化や思想を受容しているが、過去の中国の文化史の中において、中国の文化とは全く異なる文化や思想を受け入れることはなかった。その中国が、中世において異国の宗教であった仏教を受け入れたということは、文化史の中で大事件であった。仏教を中心とする交流が行われる以前のインドと中国はそれぞれが独自に固有の文化を形成していた。決して、インドと中国の文化を同じく東洋文化として括することができないものであった。中国の言語は表意文字の漢字に基づくものであり、文法が無いわけではないが、極めて単純な文法構成である。それは、漢字の置かれた位置によって文章の意味内容を規定している。それに比べて、インドのサンスクリットは大変緻密で複雑な語形変化を伴う複雑な文法を有している。それぞれの文化は、このような全く異質な言語でもって語り継がれていた。そして、中国の言語とは異なる言語で伝えられた仏教を、全く異質な中国の言葉に翻訳することは、今日我々が想像するよりも、はるかに困難を伴う事業であった。たとえば人間の見方、人間観にしても、中国の古典、中国の伝統思想では人間を細かに分析をして考

のようなことは余り認められない。ところが、インドは人間を細かに分析して考える。例えば、インドに興起した仏教では、人間を肉体と精神作用とに分けて、色・受・想・行・識というように五蘊に分析している。肉体である「色」と精神作用である「受」「想」「行」「識」というように感覚や、心の中のイメージや、意志など、人間の心理までもこと細かに分析して人間というものを捉えようとしている。このように、人間ひとつの見方を考えても全く異なった伝統があり思惟方法の相違がある。更に、時間・空間に対する見方にしても、やはり大変な相違がある。仏教が伝来する以前の中国人々は、我々の一生涯=現世を中心にして時間を考えていました。中国では伝統的に過去・現在・未来の三世の中の、現世を中心として時の流れを考えていた。要するに、我々が生きている現世の有限の中で物事を考えるわけである。ところが、インドの人はそうではなくて現在、ただ今のこの時は過去から未来への悠久の時間の流れの中で考えている。晋の袁宏の『後漢記』には、仏教が伝来し三世の因果応報を知って「王公大人、死生報應の際を観て愕然として自失せざるはなし」と記されている。今まで現世のことのみを考えていた中国の貴族たちが、三世のことを知りびっくり仰天したのである。

このように、文化の伝統を異にするインドと中国の間で仏教が伝来し受容された。仏教の中国伝来に関しては後漢明帝の感夢求法説をはじめとして様々な説がある。後漢の明帝が夢に金人をみて西方に仏教を求め、永平10年に迦葉摩騰と竺法蘭という人が洛陽の白馬寺にやって来て『四十二章經』というお經を翻訳したのが、中国の仏教伝来の最初だと信じられている。これは最もよく知られた仏教伝来の伝説である。ところが、今日では『三国志』巻30に引用する『魏略西戎伝』の記事が仏教伝来を記した最も古い文献とされている。そこには、元寿元年、即ち紀元前2年に、天竺の大月氏王の使者の伊存という者が、中国にやってきて『浮屠經』すなわち「仏經」を口授したという。この後漢明帝の感夢求法説は、仏教が自然自然のうちに伝わったのではなく、明確に皇帝の意図によってもたらさ

れたことにしようとした仏教徒の意図によって作られた伝説である。

いずれにせよ、仏教伝来の当初は、文字で書かれた経典を持って来るということではなくて、記憶して来た経典を唱えて相手に授けるという形で伝わったわけである。

中国で本格的に仏教経典の翻訳が始まったのは、後漢の桓帝（146～167）の頃に洛陽に来た安息（パルティア）の安世高や、月氏の支婁迦讃によってであった。安世高は主に禪觀經典を、支婁迦讃は初期大乗經典を翻訳した。その後、中国では数百年にわたり經典の漢訳につとめた。その努力は並々ならぬもので、383年に訳されたある論書の場合は、インド人の僧伽跋澄が記憶している梵文を読み上げ、曇無難提がそれを聞いて書き写し、仏団羅刹がそれを見ながら中国語に訳していく、さらに敏智という人が漢語に書き記すというように大変苦労して翻訳がなされた。しかし、中国語を解さない僧伽跋澄にすれば、自分が記憶してきた通りに、正しく中国語に訳されたかどうか確かめることができなかつたのである。

また、記憶して来たものを翻訳するのであるから、忘れてしまう場合や記憶している人が死亡する場合もあった。そうすると翻訳が途絶えてしまうことになる。『十誦律』の翻訳の場合には、弗若多羅という人が記憶してきたのを聞きながら鳩摩羅什が翻訳をしていたが、全61巻の訳が完成する前に弗若多羅が死んでしまい、途中で翻訳が途絶えてしまった。やがて『十誦律』をそらんじている曇摩流支という人がインドから来て、残りの三分の一を読み上げ、翻訳を完成させた。このような形で翻訳するので、訳經三藏の苦労は大変なものであった。

その後になると、梵本や胡本の写本を見ながら翻訳するようになるが、最初期の段階ではインドや西域からやってきた三藏の記憶に基づいて訳すので、今述べたような思わぬ出来事がしばしば起ったことである。

三藏法師のなかで、最も有名なのは鳩摩羅什と玄奘である。鳩摩羅什は、『法華經』や『阿弥陀經』などの翻訳で知られる大変有名な三藏であり、かつ名翻訳家であるが、意

外なことに、彼はインドの經典を中国の言葉に翻訳することなどできないと考えていた。仏陀の説かれた教え、インドの言葉で記された經典を、異国の文字に翻訳することなどとてもできない。鳩摩羅什は門下の僧叡に「翻訳をするということは、あたかもご飯を食べるとき、他人が噛んで咀嚼したご飯を食べるようなものだ。それは、単に味がないばかりでなく、かえって吐き気をもよおすであろう」と語っている。鳩摩羅什は西域の亀茲の生まれであるが、中国に来て漢詩が作れるほど中国の言葉に精通している。勿論、インドや西域の言葉にも通じている。しかも、言葉が堪能だというだけでなく、仏教の教理にも精通している。鳩摩羅什が訳した經典や論書を読めば、その力量が十分に知られる。多くの優れた經典の翻訳を残した鳩摩羅什が、実は經典の翻訳などはできないのだというのだから驚きである。しかし、翻訳についてそのように考えていたからこそ、そういうことを考えている鳩摩羅什だからこそ、中国の人々がよく理解できるように訳を工夫したのである。鳩摩羅什の翻訳は、後世の学者からしばしば創作だと、あまりに達意的である等の批判を受ける。だが、羅什に限らず翻訳三藏は、大変な工夫と努力をしているのである。

經典翻訳の際、その訳語についても様々な配慮がなされた。仏教は、ブッダが説いた教えである。しかし、ブッダの願いからすれば、仏教はすべての人々をブッダに成るようにする教えである。その仏教の開祖であるブッダをどのように中国の人々に伝えるのか。そのため經典を翻訳する三藏法師は、大変な工夫と努力をしている。ブッダとは、自覺めた人の意味であるが、単に自覺めた人、「覺者」と訳してしまえば、私たちが眠りから覚めるのと同じように理解されてしまうかもしれない。それではブッダが誤解される可能性がある。そこで仏教の開祖であり、仏教の理想とするブッダを正しく中国の人々に伝えるにはどのようにしたらよいか。そこでインドの発音の通りの漢字の音で表記したらどうか。そこでブッダに近い音の漢字の「浮屠」や「仏陀」と表記するようになった。これを音写という。ただし浮屠では日頃、よく使う漢字で

あり、しかも意味が芳しくない。そこで日常あまり使用しない漢字の方がよいということになる。仏陀の仏も陀も日常あまり使わない漢字なので異国の言葉を写すのに適している。「仏」という漢字は、ほのかとか、かすかという意味である。「陀」という漢字は、ななめという意味である。この仏陀の漢字の通りの意味からすれば、ほのかにななめということになる。これでは意味が通じないから、逆に音写語であることが理解できる。ニルバーナを滅と訳さずに「涅槃」と音写し、プラジュニヤーを智慧としないで「般若」と音写したもの、同じような配慮がなされているのである。

そういう三蔵法師達の並々ならぬ努力は、仏教を十分に評価し、正しい教えを選別し、それを中国へ伝え、保存し、万人に提供しようという願いによるものである。このことは、我々仏教図書館に関わる者が果たさねばならない役割と等しいといえる。即ち、仏教図書館が負っている大切な機能とは、仏教書を正しく評価し、選別し、保存し、提供するということである。かつて仏教伝来に関わった三蔵たちの願いと役割は、まさしく仏教図書館に働く者の願いと役割に通じるものがある。

中国仏教の初期の訳経事業は、このような困難を伴うものであった。三蔵の苦労にも拘わらず、未だ不十分なものであった。中国の佛教者にすれば、佛教を学びたくて經典を読んでも意味が通じない場合がある。そこで、經典の翻訳が開始されてからほぼ100年ほど経過した260年には、漢人僧の朱子行という人が、インドに行き自ら經典を求め、正しい佛教を中国にもたらそうと一念発起してシリクロードを西へ向かった。そしてコータンに至り、そこで『般若經』の原典を入手した。朱子行は全部で60万字に余る『般若經』の原典を全て写経した。その頃、朱子行は既に80歳を過ぎており、コータンで客死した。折角写経した『般若經』を中国にもたらすことができなかつたのである。そこで、コータンの人に頼み、中国の洛陽に届けてもらった。この朱子行こそは、中国から西方に法を求めた最初の求法僧である。その後、中国の人に佛教というものが、直接に意識され始めた3世

紀頃から、盛んに中国の人がインドへ仏典の原典を求めて旅立つことになる。我々がよく知っている法顯三蔵は、399年に律藏の不備を嘆いて数人の仲間とともに洛陽を出発し、インドに向かった。途中で死んだ者や引き返した者があり、無事にインドまで到着したのは僅か2人のみであった。法顯は、インドの經典を書写するためにはインドの言葉を学ばなければならぬと、既に古稀に達する年齢であったが、サンスクリットの勉強を始め、3年間でそれを修めた。律藏や經典を写すには、どうしてもインドの言語を学ばなければならなかったのである。春秋に富む若い学徒が、外国語を学ぶのとは異なり、70歳を越えた老僧が、インドの經典を書写するために、インドの言語の学習を始めたのである。ところが、ようやく3年間でサンスクリットの学習を終えて写すべき律藏や經典の原典を探したが、それが見当たらない。というのは、インドでは伝統的に神聖な宗教文献を紙に写すという伝統がなかったからである。聖典も紙に写すと「もの」になってしまう可能性がある。また、紙であるから水火の災害に遭遇するかもしれない。神聖な教えも紙に書写してしまえば、不注意に踏みつけてしまうかもしれない。神聖な教えを最も確かに保持するには、自分の頭の中に記憶しておくのがよい。しかし、佛教徒は、佛教の教えを多くの人にひろめた方がいいと考えて經典の書写を勧めるようになるが、法顯がインドに出かけた頃の北インドにはまだ紙に書いた經典は少なかった。3年間も梵語を学習をし、經典を写そうとしたが、容易に原典を見つけることができなかつた。たまたま祇園精舎で『摩訶僧祇律』というテキストを手に入れて、それを写した。

仏教図書館に関わる者が、仏典を収集し、保存しようという情熱も、高邁な法顯の志に及ばないとしても、これに等しいものでなくてはならないであろう。

法顯の時代（4世紀）から7世紀の唐の時代までに多くの僧がインドに法を求めた。唐の時代には、義淨が玄奘や法顯のインドへの求法の旅に感銘して求法の旅に出発する。法顯三蔵はグループで旅にでたが、玄奘三蔵の

場合は時代の制約があり、唯一人で出発した。インドへの旅は大変に危険を伴うので、多くの場合数人乃至十数人のグループで出かけた。唯一人で出かけた玄奘の場合は例外的である。インドに旅立った者の中で、成功をおさめるのは数人であり、大変に厳しい困難な旅であった。自らインドに旅した義淨は、同じようにインドに求法の旅をした僧の伝記である『大唐西域求法高僧伝』を編纂している。そこには都合65名ほどのインド求法の僧が記録されているが、そこに記された65名のうち、インドに向かう途中で既に25人は死亡し、25人は困難な旅のために挫折し中国に引き返している。無事にインドまで着いた者は僅かに15人に過ぎない。その15名の者がインドでの学びを終えて帰国の途に就くわけである。しかし、帰国の途中で4人が死亡し、6人が行方不明になり、無事に中国に帰り志を遂げた者は実に5人に過ぎないのである。義淨が知ることができた有名な僧に限って見ても、成功率は実に1パーセントにも満たない。このほかに、無名の求法僧は数限りなくいたことであろう。にも拘わらず、多くの人々が中国を出発し、インドに仏教を求めたのである。それは仏教を学びたいという燃えるような志の然らしめるところであった。

その意味からも、唯一人でインドに旅立ち成功をおさめた玄奘の求法の旅は、偉大であった。玄奘はインド留学とその往復に要した年限は17年になる。この年数に我々は驚かされるが、実はそれよりも長い年数をインドで過ごした僧が沢山いたのである。たとえば、智猛という僧は37年間を費やし、悟空三藏は40年間を閲した。これはひたすら正しい仏教のお教えを伝えたいという熱意によるものであった。そういう人々の努力によって仏教が伝来し、東アジア全体に仏教が伝わって行ったのである。

その中の、成功した僅かな僧についてのみ我々は知っているに過ぎない。志の半ば倒れた無名の僧のことは忘れているが、成功した人も、そうでない人も、共に仏教を伝えたいという厚い志を有していたことを忘れてはならない。

そういう方々の努力によって仏教が伝来す

ると、仏教經典を整理し、分類することが必然的に要求される。中国仏教において最初に翻訳された仏教經典の整理を行い、その記録を残したのは釈道安（312～385）であった。彼の伝記を読んでみると、色は浅黒く醜い人であったという。容姿が醜いので、師匠から疎んじられて十分に教えが受けられなかつた。先生から認められないからといって、道安はいじけたり恨んだりせずに、ひたすら仏道に励んだ。それは、とりもなおさず仏教を求めるという志を失わなかったからである。そして、やがて仏団澄という先生に出会い、師事することになる。そこで道安は偉大な才能を發揮することになるのである。道安が編纂した經典目録は仏教史上の偉大な功績である。

中国における經典翻訳は、後漢の時代に洛陽に来た安世高や支婁迦讃によってであった。そして徐々に漢訳された經典の数が増えていった。經典が増大すると、どうしてもそれを整理しなければならない。そこで、道安は翻訳された經典を調査し、収集し、經典の目録を編纂したのである。道安の目録編纂の作業は大変に真摯なもので、自ら全部の經典を取り寄せ、自ら読み、翻訳者や經典内容を一々確かめながら目録を編纂していった。今日、私達が後漢の時代の經典の翻訳について知ることができるのは、全く道安の目録のお陰である。道安の編纂した目録は『綜理衆經目録』という名前であるが、実にこの目録によって、中国の古い時代の仏教の様子を知ることができるるのである。この道安の目録は残念ながら既に散佚してしまったが、梁の僧祐が『出三藏記集』という目録を編集し、その中に道安の『綜理衆經目録』を引用しているので我々はそれを知ることができる。

道安は、その目録の中に「疑經類」という分類を設けている。そこでは本当の經典と疑わしい經典とを厳密に区別している。現に疑わしい經典が存在するので、そのような經典の目録を作ったのである。その中で道安は、次のようなことを語っている。農民が田んぼの中に稻以外の草を生やしておけば恥ずかしいことである。また、金庫の中にお金ではない石ころが詰まっているとすれば、それは大

変に奇妙なことである。稻と草との区別がつかない、お金と石ころの区別がつかないようでは大変に恥ずかしいことである。仏教徒として、そういうことがあってはならないと警告しているのである。

道安は、自ら仏教の伝統に預かる者として「清濁の流れを交えず」と語り、清流と濁流は区別しなくてはならぬ。龍と蛇とは区別しなくてはならない。もし正しい書物を選別せず、正しい仏教を弁えず、疑わしい書物を放置すれば、獅子身中の虫のようにやがて仏教を滅ぼすことになる。そこで仏教として疑わしい經典を調査し記録したのである。このことによって、将来、仏教を学ぶ人のために役立つようにしたい。このような願いをもって道安は目録を編纂している。

中国の古い時代の經典目録に道安の『綜理衆經目録』があるが、日本にも興福寺の永超が編纂した『東域伝灯目録』という目録がある。仏教を学ぶ者はよくお世話になる目録である。この目録は、永超が81歳の時に自ら一々校正し、完成し、青蓮院に献上したものである。永超はこの目録に当時存在した書物については一々所在を記し、また、他の目録によって記録したものについては典拠を示している。このような先人の努力によって、日本の奈良時代の仏教を知ることができる。

このような仏教の歴史において、仏典の記録に関わった人々の努力は、今日の新しい図書館で働く図書館員の使命と全く等しいものである。即ち、中国の道安や僧祐、日本の永超、或いは高麗の義天などは、皆、仏教の資料を厳密に評価し、選別し、整理し、保存している。近代的な図書館の中で、殊に仏教の図書館に携わる我々は、資料を評価・選別・整理・保存などにつとめ、それをあらゆる人々に、何時でも、何処にでも提供しなければならない。そういう役割を我々は果たさねばならない。

いずれにせよ、先達の大変な苦労があつてはじめて東アジア端の日本にまで仏教が伝わり、その仏教が我々の文化の中で大きな影響を与えていた。

仏教が日本の文化に影響を与えたごく卑近な二、三の例を挙げることにしたい。我々は、

日常、日本語でものを考え、かつ書いている。その日本語の五十音の「アイウエオ」は、仏教とともに伝わってきた「悉曇五十字門」に拠るものである。悉曇五十字門は『涅槃經』など多くの經典に説かれている。また、「いろは」は、やはり有名な經典の『涅槃經』に説かれている雪山童子の求道物語に拠っている。雪山童子という若く志の豊かな青年が、ヒマラヤの中で修行をしていた。ところが、どこからともなく「諸行無常、是生滅法」という言葉が聞こえてきた。あらゆるものはみな変化するものであるとの声が聞こえてきた。まわりを見渡すと、そこに鬼（羅刹）がいた。鬼（羅刹）に向かってあなたが言ったのかと尋ねると、そうだ私が言ったと答える。それでは後の言葉を聞かせてくれと言うと、鬼（羅刹）はお腹がすいてこれ以上は話すことができないと答える。食べ物を取って来るから教えてほしいというと、鬼（羅刹）は、私は、人間の肉しか食べないし、人間の暖かい血しか飲まないと語る。雪山童子は、じゃあ私の身体を食べてもいいからどうか後の言葉を聞かせてほしいという。そこで、雪山童子は自分の身体を与えることを条件に、羅刹から「生滅滅已、寂滅為樂」という言葉を聞く。我々は生滅変化に執われて生きているが、それを超えた世界にこそ本当の人間の安らぎがあるということを教えられる。この『涅槃經』の雪山童子の求道物語に、我々の先輩は非常に感動した。そこで、法隆寺の玉虫厨子にもこの雪山童子の「施身問偈」の絵を描いた。この『涅槃經』に出てくる雪山童子の求道物語によって作られたのが「いろは」である。この「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」の「無常偈」は漢字ばかりであり、耳で聞いてもよく意味が分からない。そこで、これを分かりやすく日本語に翻訳したのが「色はにはへど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ、.....」で始まる「いろは歌」である。こうして「いろは」は子供から大人まで老若を問わず、広く知られるようになり、知らず知らずに仏教の教えに親しんでいったのである。

「東海道五十三次」も、『華嚴經』が出典である。善財童子という一青年が、志を抱き悟

りを求めて、五十三人の善知識を次々に訪ねて行く。この『華厳經』の物語に拠ったのが東海道五十三次である。江戸から京都への旅は、ただ単に物見遊山ではなくて、自らの生き方を確かめるための旅であり、あたかも善財童子が法を求めたと同じようありたいと願ってのことなのである。

我々の先輩は、仏教を単に葬送儀礼や法事のためだけでなく、自分の生活に生かし、人間の営為である文化の全体に反映させていたのである。従って、おおよそ仏教と関係ないような言葉にも仏教の思想が反映している。例えば、「道楽」という言葉がある。人には様々な道楽がある。釣りや盆栽や、様々な道楽がある。仏伝を説いた『仏本行集經』などの經典には、「仏が道楽を得た」と説いている。仏陀が道楽をされたとはどういう意味か。道楽とは何か。ここでいう「道」というのは、悟りのことである。中国の人は、仏陀の正覚の悟りを中国伝統の言葉である「道」という語で表記した。そこで、長い修行の果てに得た悟りの歎び、正覚の感激を道楽という言葉で表した。釈尊は出家をして6年間の修行をなし、ついに35歳の12月8日の晩に菩提樹の下で悟りを開く。この感激は何にも代え難いものである。悟りの感激は、私たちが感じる日常の楽しみとは比較にならないものである。そこで、仏は私達にも仏と同じような道楽を求めよと教えられる。しかし、仏の悟りの歎びは如何に素晴らしいものであったとしても、我々は容易に悟りを得ることはできない。どれだけ素晴らしいものであったとしても、自分の手に入らないものであれば、その歎びを味わうことができない。そこで凡夫は、まあ、手近なところでパチンコでもして、道楽をしましようということになる。このように道楽という言葉が生活の中に取り入れられる。これと同じような言葉に悟りを開いた人の内心を意味する「内証」がある。悟りを開いた人の内心は、同じく悟りを開いた人にしかわからない。他人から窺い知ることはできないということから、内証が秘密を意味するようになる。我々の家の入り口を「玄関」という。これも単に出入り口というのではなく、玄関というのは仏教の言葉に拠っている。玄

関は、「玄」すなわち奥深いところの入り口という意味である。私たちの家の出入り口も、実は奥深い仏教の悟りへの入口として玄関に準えているのである。

先日、テレビに「日光」の「華厳の滝」が映っていたが、この「華厳の滝」は言うまでもなく『華厳經』に基づくものである。天台宗の教相判釈の「五時八教」という難しい教義に基づいているものである。「阿含の滝」、「般若の滝」というのもある。日光の名所の華厳の滝は、天台宗の教義によって『華厳經』から来ているが、更に「日光」という地名も、実は仏教の教義に基づいている。即ち、日光は観音菩薩の住所の名なのである。観音菩薩の住所を、インドの言葉のサンスクリットでは、「ポタラカ」という。それを漢字で補陀洛と表記し「ふだらく」と読む。その補陀洛がやがて訛り「ふたあら」となり、二荒と漢字で書くようになる。二荒を訓で読めば「にこう」となる。そこで、二荒の荒が漢字の意味があまり芳しくないので、「にこう」の音を日光の漢字で表記するようになり、今日の日光になる。即ち、観音菩薩の靈場であるボタラカが補陀洛となり、二荒となり、日光となつたのである。ちなみにチベットのラサにあるボタラ宮殿も、この観音菩薩の住所のボタラカと語源は同じである。

また、地名の日光が実は仏教の言葉であり、サンスクリットに基づくものであるが、地名のみならず、よく知られている「カルピス」という乳酸飲料の名前もサンスクリットによっているのである。カルピスの会社を設立したのは、三島海雲という大阪の真宗の寺院の出身の方である。後には、財團を作つて仏教聖典の編纂など援助をした人である。三島海雲は若くして中国大陸に渡り、大きな成功をおさめた。やがて帰国してから、かつてモンゴルで飲んだ乳酸飲料を日本でも作りたいと考え、それを完成させた。そこで彼は、自分が作った乳酸飲料に何という名前を付けようかといろんな人に相談した。その相談にのつたのが大正大学の渡辺海旭という先生であった。渡辺海旭先生はサンスクリットに詳しく述べ、また『大正新脩大藏經』の編纂に中心的な役割を果たされた先生である。その渡辺先生は

三島海雲氏にアドバイスされた。牛乳からできた乳製品は、仏教の經典の中にもしばしば出てくる。仏教の中に「五味」という言葉がある。乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐の五味については『涅槃經』に説いている。そこで渡辺先生は、三島海雲氏の製造した乳製品は、まさしくお経に説いている最高の乳製品である「醍醐味」である。そこで、この「醍醐味」を意味するサンスクリットである「サルピス」にしたら良いでしようとアドバイスした。ところが、大正時代は、まだ日本全体の栄養状態が良くなく、カルシウムの必要性が叫ばれていた。そこでカルシウムの「カル」とサルピス「ピス」を合わせて「カルピス」という名前にしたのである。そのカルピスのキャッチフレーズを「初恋の味」とした。聞くところによると、カルピスの売れ行きが悪くなると「初恋の味」のコピーを使うと、たちまちに売れるようになったということである。このように我々の生活のなかの飲料水にまでも仏教のことばに基づくサンスクリットが生きているのは意外なことである。

仏教は東アジア全体の文化に絶大な影響を与えている。その仏教の伝来に関わった多くの人々の苦労を思い、感謝しなくてはならない。遙か彼方のインドまで仏典を求めて旅に出た法顯三蔵や、玄奘三蔵や、漢訳された仏教經典を整理し目録の編纂に努力した中国の道安や、我が国の永超をはじめとして、經典の研究につとめ章疏を著し、人々に流布せしめるように尽力した仏教者の志と生き様は、まさしく近代の仏教図書館が背負っている役割と異なるものではなかった。我々は現代の整備された図書館で働いているが、その役割は仏教の典籍の収集し、整理し、あらゆる人々に提供することを役割としている。これは玄奘や道安らが目指していた役割と異なるものではない。仏教図書館の館員は、まさしく仏教伝来に関わった人々の伝統に預かる者である。今日、仏教図書館に働く我々は、そういう先達の流れ、伝統に預かっている人間である。仏教伝来につとめた先達たちのご苦労を知り、その言葉では言い表せない努力に感謝することが必要ではなかろうかと思うのである。

ここで改めて、我々は、21世紀に向かって仏教を正しく評価し、選別し、保存し、あらゆる人々に、いつでもどこでも、仏教の正しい教えを提供しなければならない。仏教は仏陀が菩提樹の下で真理に目覚められた。釈尊が理法に目覚められたことは、実に尊いことである。この宇宙が、太陽が、月が、一定の理法に従って運行しているように、人間の生き方にも、一定の理法=ダルマがある。太陽の運行が、自然の営みが、理法に則っている。太陽が間違って西から出ることはないが、人間の営為には過ちがある。人間は往々にして理法に背き、過ちを犯す。人間の過ちを訂正し、人間の苦悩を解決するにはどうしても、拠り所となる理法がなくてはならない。是非とも仏教がなくてはならないのである。

我々が、図書・資料や情報を集め、その整理をし、それを何人の求めにも応じ、提供し準備することは、すなわち、仏教図書館の役割や活動は、仏教伝来に關係し多くの人々の志を生き身をもって生きることに他ならない。仏教の伝統に預かる我々の任務は、これから21世紀に向かって益々重大になってくるであろう。

私は、図書館に着任してまだ1ヶ月あまりの若輩ではありますが、仏教伝来を歴史を振り返る時、今の様なことを強く感じる次第である。